

「ニルス・ヒューベル教授来日講演集」

バルト＝スカンディナヴィア研究会『北欧史研究』第25号別刷

2008年8月

翻訳：1

ネーションから見た中世デンマーク

ニルス・ヒューベル

（小澤 実訳）

近代ヨーロッパ語で言うところのネーションの語源は、民族、生まれ、人種、階層を意味するラテン語 *natio* にさかのぼる。この *Natio* には、古代の歴史家が自らが知る世界を記述する際に用いた下位カテゴリーが含まれる。ギリシアの歴史家ヘロドトス（c.484-c.425BC）は、東地中海と小アジアを歴訪する中で自分が見、聞き、読んだことを書き記す場合、特に現地で彼が出会ったいわゆるエトノス *ethnos* の宗教伝統、社会慣習、言語、物質文化、経済システムに焦点を絞っていた。エトニ *ethne*、つまり民族とは、彼が説明を加える世界の単位であった。彼はその民族をさらに部族（*gene*；単数 *genos*）へと下位区分し、詳細に記述した。

ローマの歴史家が用いる社会単位もやはり民族（*gens*）であった。ローマ人は隣人たる蛮族を民族（*gentes*）に分割し、ヘロドトス以来の古典的エスノグラフィの一部を構成していた様々な特徴をそれぞれの部族に当てはめた。民族を結びつけるのは宗教的、法的、政治的伝統が一体となったものであった。このようにローマの伝統によれば、一つの民族であるならば、祖先神話、文化伝統、法システム、そして主導者を共有していた。ただしそれらはいずれも確固たるものではなく、変化もすれば議論的になることもあった。

以上のような背景のもと、3世紀にはアレマン人（*Alamanni*）、フランク人（*Franci*）、サクソン人（*Saxon*）といった民族呼称が現れた。ローマ人著述家は、ライン境域に現れたすべての民族をゲルマン人（*Germani*）として言及し、さらにその中でもライン下流域に住むものをフランク人

（*Franci*=自由人）、上流域に住むものをアレマン人（*Alamanni*=民族）として区別した。北海沿岸部からの略奪者は3世紀以来ローマを劫略していたが、その後ローマ軍に加わるものも出てきた。ローマ人はこのような海賊と略奪を事とする独立集団をサクソン人と呼んだ。実のところフランク人（*Franci*）、アレマン人（*Alamanni*）、サクソン人（*Saxon*）という呼称はいずれもゲルマン語であった。したがってローマ人はその呼称をゲルマン人側から採用し、それらを集合アイデンティティを持つとみなした独立先住民集団を指す新しい呼称とせしめたにちがいない！。

民族集団を区別し、エスニックなラベルを用いて世界を記述するという行為は、古代のエスノグラフィにおいては珍しくもないやり方であり、それは聖書の世界観にまでさかのぼる。こうしたエスニック集団が文化と集合アイデンティティを共有するという考えは、独立した蛮族集団それぞれが有していた、他とは異なるアイデンティティ感情に対応していたのかもしれない。そうした感情は対面社会を形成する小さな集団の間では当然の事であっただろうが、末期ローマ人がフランク人やサクソン人と呼んだ巨大なエスニック共同体を記述するのには相応しくなかった。そのような呼称は、政治に資する抽象的構築物であった。それはローマ人にとっては必要であっても、隣人たる蛮族には不必要であった。このようなエスニックな構築物は、新しいキリスト教諸王国が出現してようやく、北ヨーロッパでは妥当性を持つようになった。

他者の課したエスニックなラベルを我が物と

し、それらを共通アイデンティティを創出する手段として利用することにより、初期中世のエスニシティは、古典古代においてそうであったのとまったく同じように、統合と差異化という二重の機能を果たすことになった。フランク人である、またゲルマン人であるという栄光は、自分が他のいかなるものとも異なり、その名称に誇りをもつことからくる栄光でもある。ワルター・ポールは次のように述べる。

…エスニックなアイデンティティは、フランク王国やゲルマン部族国家といったような巨大な政治体の基礎として再形成された。4世紀から12世紀にかけて、多数の「実験的」共同体が新しい形の正統性と組織を創造し、帝国、都市、部族に基づくローマ世界を克服しようとした。時が経過するにつれて、この新世界はキリスト教、王国、民族に基づく世界を発展させ、多様性に拍車のかかる地域共同体を纏め上げようとした²。

初期中世において、様々な形をとる Danish もしくは Denmark の様々な異形もまた、そのほかのヨーロッパのエスニシティもしくは地誌に関わる用語と同様に、ポールが論じるまさにその変化を経験した。このような用語は、もはや世界の一部をなす民族に適用される抽象物ではないし、特定の地理空間を指し示すのに用いられる地誌的用語でもない。仮にそうであったとしても、そのように定義された集団のメンバーにはなんら妥当性を持たなかったであろう。いまやそれらは統一の論拠として用いられる用語へと変容し、その名前と関連する伝承を独占かつ体得しようとするリーダーが利用した。彼らは古典古代のエスノグラフィや歴史家の創出した地誌的そしてエスニックなラベルを我が物とし、そしてそれらの用語と関係する、本質的に異なる伝承を採用した。彼らと同様にデーン人のリーダーも王統譜や神統譜、歴史伝説、英雄的事績というかたちで新しい伝統と新しいイデオロギーを創出することに成功した。彼らのキリスト教への改宗もまた、デーン人というこの新しいアイデンティティ感覚を強化するものに他ならなかった。

デーン人という呼称

デーン人 (Dani) という呼称が古典文献に初出するのは、6世紀の行政官僚ヨルダネスの『ゲティカ』である。彼によれば、デーン人はスヴェア人 (Suetidi) の血統をひき、ヘルール人 (Heruli) を追放して定住した。謎の多い北方民族ゴート人の歴史である『ゲティカ』は、政治家カッシオドルス (c. 485-585) によるゴート人の歴史を記した数巻に渡る逸失本の要約として、6世紀の半ば頃、コンスタンティノーブルで執筆された³。ほぼ同時代、もう1人のビザンツ帝国の歴史家プロコピオス (c. 500-565) もまたゴート人の後の歴史についての作品をものし、そこでデーン人 (Danoi) という呼称を用いた。

プロコピオスによれば、ヘルール人の一部は、ランゴバルド人に敗北した後、北方へと足を向け、スラブ人の土地を経て、デーン人の土地へとたどり着いた。彼ら野蛮な民族はいずれもヘルール人を攻撃したとは伝えられておらず、彼らは大海に到達するや船に乗って向かった。その後、なおもローマ人治下で生活していたヘルール人集団は、ある貴人をチューレに派遣したが、彼は道半ばで病にかかり、デーン人の土地で死んだ。プロコピオスによれば、デーン人の土地は大洋に面した大陸の極北にあり、そのはるか北方に、ブリタニアの10倍もの規模を誇るチューレという島が浮かんでいた⁴。

6世紀の後半、ガロ＝ローマの歴史家にしてトゥール司教グレゴリウス (c. 538-594) は、その著書『歴史十書 (Decem Libri Historiarum)』(後世『フランク人の歴史 (Historia Francorum)』と呼ばれた) の第3書において、クロキライクス (Chlochilaichus) に率いられたデーン人 (Dani) が、テオデリクス治下のフランク王国の海岸をいかに荒らしまわったかを伝えた⁵。ほぼ同じ頃、グレゴリウスの同僚でポワティエ司教であったウェナンティウス・フォルトゥナトゥス (+c. 609) もデーン人 (Dani) に言及したし、およそ百年後にラヴェンナの逸名地理学者は Dania という語形を用いた⁶。

さらに1世紀ののち、当時の代表的学者のアルクインは、780年代から90年代にかけカール大帝の宮廷で教師をつとめ、796年にトゥールのサ

ン・マルタン修道院長となった。彼は790年ごろザクセンのある修道院長にあてた書簡で、デーン人が改宗する(*de Danorum conversione*) 見込みがあるかどうかと尋ねている。830年代の初頭に発給された教皇証書は、デーン人に触れた初めての証書であった。そこではグレゴリウス4世がハンプルク司教座を大司教座へと昇格させ、ランス大司教エッポとともにハンプルク大司教アンスガルにも、スヴェア人とデーン人(*gentibus Suenonum siue Danorum*) に対して宣教活動を行う権利を付与したと伝える。833年、マーシア王ウィグラフは、イングランドの司教連ならびに世俗君主らと共に、デーン人海賊(*Danicos piratas*) に関しての会議をもった。830年以降、イングランドでも大陸でも、権利証書——とりわけ北方民族に対する宣教に関する教皇証書——でデーン人に言及することが増えた⁷。

741年のカール・マルテルの死に始まり、829年まで記録される『フランク王国編年誌』は、デーン人について初めて言及した年代記である。その798年の記事では、エルベ北方のザクセン人が、デーン人の王シグフRezのもとへの途路にあったカール大帝の特使ゴットシャルクを殺害したと伝えられる。この王に関してはこの年以前の記事でも言及されている。777年、反抗的なウェストファリア人ヴィドゥキントは、シグフRezの元に逃走したと伝えられている。782年、彼はノルマン人(*Normanni*)の王と呼ばれている⁸。デーン人は西フランク王国の編年誌において言及されることがままあり、そこでは「デーン人の言葉 *lingua Danorum*」や「デーン人の境界 *Danorum termini*」についてすら語られている。しかしながら、この境界については別の場所で「ノルマン人の境界 *confinibus Nordmannorum*」とも言われている⁹。デーン人(*Dani*)とノルマン人(*Nordmanni*)という呼称は、この編年誌中では同値として扱われている。しかしながら9世紀フランク王国の年代記作家たちは、北方民族も様々であることを十分に理解していた。そしてすでに6世紀のヨルダネスがそうしたように、北方民族やノルマン人の間にも区別を施した。アインハルドゥス(c. 770-849)はフルダの修道院学校で教育を受け、若いときにカール大帝の宮廷に入り、ただちに王の信頼を勝

ち得た。彼はカール大帝の生涯を綴る際に、デーン人(*Dani*)とスヴェア人(*Sueonos*)に触れ、彼らを北方民族、つまりノルマン人(*Nordmannos*)と考えた¹⁰。東フランク王国の年代記で最も重要かつ量のある『フルダ編年誌』では、北方民族の中で最も勇敢であるのはデーン人だとすら述べている¹¹。

865年から876年の間に執筆された『アンスガル伝』というリンベルトの手になる宣教年代記も、様々な北方民族に触れている。最初の言葉は次の通りである。「ノルトアルピニア〔訳注：エルベ北方〕の初代司教にして教皇庁の使節たるアンスガル師の生涯、事績、死についての書がここに始まる。スヴェア人、デーン人、スラブ人そしてこれまで異教にとどまっていたその他の北方民族へと遣わされた」¹²。リンベルトはこの書において、デーン人、フリースラントに接するデーン人の地、デーン人略奪者について語り、デーン人はある種の事柄について集合知を持っており、1人の君主によって支配されるが、デーン人の土地に対する名前を用いることはない¹³。それと同様にフランク王国の年代記作家も、10世紀の初頭になるまでは、デーン人の土地に対する地理的呼称は与えていなかった。

デンマークという呼称

908年にトリアーで執筆されたプリュムのレギノによる年代記は、デンマーク(*Denimarca*)に1度言及している。他方でこの年代記は、デーン人(*Dani*)には一度も触れていないが、ノルマン人(*Nordmanni*)は数え切れないほど挙げている。デンマークに言及する節においてこの年代記は、デンマークからキネム(*Kinem*)に到着したノルマン人が、ゴズフRezの命令に従ってラインを遡行し、ドゥイスブルクを占拠し、いつものように越冬地に要塞を建設したことを伝える¹⁴。『古英語版オロシウス』で、スキリングサルからヘゼビューヘといたるオウツタルの航海の最南部の記述するセクションにおいても、デンマークという言葉が用いられている。彼に従えば、「スキリングサルから出帆するや、3日にわたってデンマークが左舷に、大海が右舷に控えていた」¹⁵。テクストの通りだとすれば、オウツタルは口頭で直接イ

ングランド王アルフレッドにその旅を報告した。

この箇所が『古英語版オロシウス』でアルフレッド王に言及する唯一つの箇所である。かりにこの文言を信じるとするならば、オウツタルの航海日程について述べられていることは、9世紀後半におこったことであり、イングランドへ立ち寄ったのはアルフレッド王が死去する899年以前の事となる。そして『古英語版オロシウス』の成立年代に関して以上の事実から引き出されるのは、アルフレッドを王として言及していることから、彼が871年に即位する以前には、少なくとも現在伝来する形では完成しているはずがないということである。『古英語版オロシウス』の起源について触れている最初期の記録はマームズベリのウィリアムによる『イングランド王の事績』であり、そこでは編纂作業がアルフレッド王に帰されている¹⁶。『古英語版オロシウス』の現存する写本は4つのみであり、校訂テキストのベースとなっている最古のものは、891年から924年までをカバーする『アングロサクソン年代記』のいわゆるパーカー写本の第2写字生と同一人物の手になるようである。この古書体学的な解釈が正当なものであるならば、『古英語版オロシウス』の現存する最古の写本は924年以降でおそらく955年以前、つまり『アングロサクソン年代記』パーカー写本の第3写字生が924年から955年までの記事を書き込むのを終えた時である¹⁷。以上から得られる結論は、10世紀の前半にデンマークという名称はイングランド、そして大陸ヨーロッパの西方で知られていたということである。

デーン人の土地をデンマークと呼称するのは、今述べた事例よりもそうさかのぼるわけではない。10世紀末のエセルウェアードは、その呼称の使い方がやや奇妙であるとはいえ、それを近年にできたものと述べている。彼による『年代記』の449年の項目で、彼は「サクソン人はライン川から、俗にはデンマーク(Danmærc)と呼ぶドニア(Donia)の町に至るすべての沿岸で海賊行為に精を出していた」と伝えている¹⁸。中世デンマークの編年誌群では、Daciaがデンマークをあらわす通常の呼称であった。このため、デーン人の土地に対する語源は10世紀以前にさかのぼるといふ誤りに我々は陥りやすい。Daciaは時として

古典期や古代末期のテキストに言及されていたからである。しかしながら古代の文献で言及されるDaciaはローマ管区のダキアであり、それは地理的には現在のルーマニアと大体一致する。この地域はその後『フランク王国編年誌』において、ドナウ川に隣接するブルガリア・ダキア(Bulgaris Dacia)として説明された¹⁹。かくして、デーン人の地に対する地名の様々な異形は900年ごろ、さらに言えば10世紀初頭になって現れたようである。プリュムのレギノの『年代記』ではDenimarca、『古英語版オロシウス』ではDenemærc、エセルウェアードの『年代記』ではDanmærcである。いずれの呼称にせよ、中世デンマーク編年誌群において採用されたラテン語化されたDaciaという呼称と通じるものがある。

デーン人の土地に対する本来の名前とほぼ一致する第4ならびに第5のかたちは、10世紀頃と思われる2つのデンマークの史料中に見出される。ユラン半島南東部イエリングには2つのルーン石碑があり、小ルーン石碑は、ゴーム王が彼の亡妻チューラを偲び、「デンマークの回復者tanmarkar but」と賞賛している。他方大ルーン石碑では、彼らの息子ハーラル青歯王が、「すべてのデンマーク(tanmaurk)とノルウェー(nuriak)を勝ち得、デーン人をキリスト教化した(auk tani kristna)」と高らかに宣言した²⁰。この2つの石碑がゴームとハーラルによって建立されたとするならば——そうであるとは言い切れない——、それぞれは10世紀の第2四半世紀と第3四半世紀にさかのぼる。しかしながら、イエリングのルーン石碑は後世のデンマークの政治リーダーによって建立された可能性もある。そうだとすれば、ユラン半島で権力を強固なものにしようとしていたスヴェン・エストリズセン(治世1047-76年)がその人物であったかもしれない²¹。

tanmarkuという語形は、ユラン半島北部のスキウム(Skivm)のルーン石碑にも見出される。そのテキストには、母チューラと息子オディンカルとグズムンドがその夫にして父を記念し、彼がデンマークにおけるlantmanaの最良にして第一の者であったことで彼を賞賛している。刻字の文体はイエリングの石碑と類似しており、おそらく同時代のものである²²。示唆的なことに、この

tanmarku という語形は、スウェーデン本土とバルト海のゴットランドの間に浮かぶエーランド (Öland) の南端にある同時代のルーン石碑にも見出される。その銘文は、首領であつたらしいシッベを記念している。ここで tanmarku に言及したコンテクストは不明であるが、シッベはエーランド島で殺害されたデンマークの首領であつたという仮説は立ててもよいかもしれない²³。

いずれにせよ上述した史料からは、デンマークの呼称は、まずはイングランドと大陸の年代記に現れてすぐのち、野心溢れるデンマークの首領たちに用いられたと結論できる。デンマークという言葉は、そこの住民であるデーン人 (Dani) という言葉に比べればはるかに新しい。かりにその言葉が史料に現れたのが実際の成立年代を反映している事であるならば——そうであるという確証はないのであるが——、965 年にドイツ＝ローマ皇帝オットー 1 世によって発給された国王証書がデンマークという呼称の起源と意味を明らかにしてくれるだろう。この証書は、スレスヴィ、リーベ、オーフスの所領に住むすべての *servos et colonos* に対し、「辺境領もしくはデーン人の王国にある *in marca vel regno Danorum*」当該教会を除いて、賦役ならびにいかなる個人の権威からの免除を認めた²⁴。写字生は明らかに、そして皇帝の役人、おそらくは皇帝すらも、デーン人の土地は王国とするべきか辺境領とすべきはわかっていなかった。これは 10 世紀における地政学的状況を考慮すれば驚くべきことではない。965 年より 20 年が経過した後、ハーラル青歯王はノルウェーに足場を得、ドイツ＝ローマ皇帝のくびきを緩めようとしていた。しかしオットー 1 世の書簡が示すところによれば、ドイツ側はデーン人の土地を、皇帝によって支配され防衛される境界、つまり辺境領 *marca* と見なしていた²⁵。この見解は、皇帝オットー 3 世が発給した、リーベ、スレスヴィ、オーフス、オーデンセの教会に対する特許——たとえばその教会が「デンマーク王国に *in regno Danorum*」位置していると曖昧にしか言及されていないとしても——の中でも堅持されている²⁶。皇帝は、支配できていないと考えている領域で特権を与えることはできなかっただろうし、支配しているという印象を与えようとしただろう。ドイ

ツの宣教を綴った年代記がドイツ＝ローマ皇帝の見解を強調するのは当然であるが、考古学的な証拠もその見解を補強する²⁷。西フランクの編年誌で説明される、ザクセンの北方にある敵対的なノルマン人の境界 (*confinibus Nordmannorum*) は、東フランクならびにその後継者であるオットー朝の見方に立てば、服属した「デーン人の辺境 (*marca Danorum*)」と特定された²⁸。

デーン人の首領が服属の響きを持った呼称を採用したのは皮肉なことであるが、それが現実である。ひょっとすると彼らはその含意に気付いていなかったのかもしれないし、とりあえず受け入れてそれを利用していたのかもしれない。後者の解釈のほうがはるかに説得的である。この後見るように、デンマークという呼称は 12 世紀末にいたるまでずっとデーン人の土地が享受した地位と——少なくともドイツ皇帝の目には——ほぼ対応していた。国王証書におけるデンマーク (*Denmearcon*) という呼称の初出は 1020 年ごろであった。その時デンマーク王であることを宣言した初めての王であるクヌート大王は、1020 年代後半の国王証書では、「全イングランド、デンマーク、ノルウェーそしてスウェーデンの一部の王であるクヌート (*Canutus, rex totius Angliae et Denemarciae et Norreganorum et parties Swavorum*)」と称した。すでに見たように、デーン人の王であることについて語ることが他国の文献や国王証書では珍しくなかったが、デーン人の土地に居住し、デーン人の支配者であると主張した最初の人物は、クヌーズ聖王の寡婦アデラであった。彼女が「神の恩寵によりデーン人の王妃 (*Dei gratia Danorum regina*)」と自称した 1090 年ごろの書簡こそが、ハーラルがデーン人 (*tani*) をキリスト教化したと主張するイエリングの大ルーン石碑を除いてデーン人に言及した初めてのデンマーク史料である。アデラは「デーン人の王妃」という定型表現を示した文書を後世に伝えた最初の人物でもある。その表現を用いた現存最古の書簡は、12 世紀初頭にニルス王が「神の恩寵によるデーン人の王ニコラウス」と称している。その後この定型表現は国王証書においてありふれたものとなった²⁹。デンマーク王という称号の初出は 1152 年に、王国全体への権利主張を実現しよう

とした王位請求者の一人であるスヴェン・グレーテが、「デンマークの王スヴェン (rex Swein de Tenemarch)」と自称したときである。ここに見えるデンマーク (Tenemarch) の最初の文字が、イエリングのルーン石碑で用いられた T であり、最初期の外国の史料や後世のデンマークの史料において用いられた D ではないことが示唆的である。

その 20 年前、Dania というラテン語形が『ロスキレ年代記 (Chronicon Roskildense)』で採用された。9 世紀から 1139 年にいたるデンマークの政治ならびに教会史を扱うこの史料は、デンマーク人が執筆したおそらく最初の年代記である。そうだとすれば彼はロスキレ司教座出身であり、政治的にはシェラン人の立場に立っていた。同形の Dania は、およそ 80 年前に、ドイツ人の年代記作家ブレーメンのアダムが『ハンブルク大司教座事績録』のなかで採用していた。1200 年ごろ、サクソ・グラマティクスは最も包括的なデンマーク中世の年代記『デーン人の事績 (Gesta Danorum)』で同じ表現を用いた³⁰。以上で述べた状況とは対照的に、註の 19 で挙げたようなデンマーク中世の編年誌群は、Dacia というラテン語を用いた。それは現在のルーマニアに位置するローマ行政管区ダキアと同じ語形であった。この形のデンマークは最初、オーデンセで執筆されたと思われるデンマーク初の聖人伝の 1 つに現れた。著者エルノースはケントのカンタベリで生まれた聖職者であったが、デンマークに 24 年間住み、1120 年代の初頭にクヌーズ聖王の聖人伝を執筆したときですら、自らは追放の身であると感じていた、と伝えられている。この聖人伝の依頼者はクヌーズ聖王の兄弟であるニルス王 (1104-34) であり、当然の事ながらエルノースはデンマークの支配者としてニルスを讃えた³¹。

中世王国とナショナルな歴史記述

ハーラル青歯王とその後継者たちが支配した領域はどこまでであったのか、彼らが行使した権威の本質は何であり、それはどの程度であったのか、そしてまたヴァイキング時代後期から中世初期にかけて、ドイツ皇帝がデンマークにどの程度の政治的影響力と権力を行使したのかという問題は激

しい議論の対象となってきた。しかしながら、1157 年にヴァルデマー 1 世が絶対的な政体を確立した後でさえ、デンマークは、少なくとも形式的にはドイツ帝国に従属する辺境領であるとみなされていた。このような形式上の家臣という状態は、1182 年にヴァルデマーの息子クヌーズ 6 世が登位することで終わりを告げた³²。サクソ・グラマティクスは、1162 年にヴァルデマーがドールでフリードリヒ・バルバロッサに誠実宣誓を行った状況を雄弁に語り伝えている。

サクソは封臣制度の儀礼的側面に通じており、封臣という身分が、理想的な中世王国には備わっている領域支配圏とは矛盾することをよく理解していた。したがってサクソは、ヴァルデマーの誠実宣誓がもたらす不名誉をトーンダウンしている。しかしながらこのコンテキストにおいて、より興味深いのは、この出来事を記述するに際してサクソがヴァルデマーの王国をデンマーク人と同じ位置に据えたことである。それと同様に興味深いのは、彼がデンマーク王国の支配者を自由なデンマーク民族と同義であると考えていることである³³。王国とネイションは一つとなった。王と民族の一体化は、サクソの作品において中心事である。『デーン人の事績』のもう一つの特徴は、ダンとアングルの伝説で幕を開けることである。伝承によれば、アングルはアングル人の創始者となり、その子孫が後にブリテンを征服したが、ダンは我々、つまりデーン人の王室の創設者となり、幾世代にもわたって継続してきた、とサクソは述べた³⁴。この伝承に従うならば、デーン人という名前とデンマークの王朝は同じ根を持つことになる。

サクソはナショナリスティックな枠組みで歴史を叙述したが、それには十分な理由があった。民族から成長した特段古い王朝を創出することにより、脆弱な王国をイデオロギーという点で下支えするのが彼の目論見であった。彼はデーン人といういにしへの構成物を引き継ぎ、デンマーク王朝という新しい構成物を練り上げ、それらを結び付けてナショナル・アイデンティティへと統合し、国王ヴァルデマー 1 世周辺の狭い排他的サークルに伝えた。とはいえ、サクソはデンマークのナショナル・ヒストリーを書いた最初の人物ではなかった。上述した『ロスキレ年代記』こそが——執

筆当時の国王であるニルスを十分に評価しているわけではないが——そのような試みの初出であった。かくして、中世デンマークの領域内部で作成された史料中にデーン人とデンマークという呼称の使用例が確認されておよそ1世紀のちに、デンマークのナショナルな歴史記述は始まった。それは「神の恩寵によりデーン人の王 (Dei gratia rex Danorum)」という定型句が初めて現れた文書とも同時代であった。サクソはナショナルな歴史記述の最初の事例ではなかったが、その分野の最後の事例でもなかった。

中世から現在に至るまでのデンマークの歴史記述の背骨となったのは、ナショナル・ヒストリーであったといっても過言ではない。サクソが古代の伝承を引き出して中世デンマークのネイションを喧伝したのとまったく同様に、1495年に最初のデンマーク語印刷本となったいわゆる『韻文年代記 (Rimkrønike)』において、サクソの遺産は採用された。中世末以降、サクソの作品はクリスチャン・ペザーセン (Christian Pedersen, c. 1480-1554)、ポウル・ヘルゲセン (Povl Helgesen, c. 1485-1535)、ペザー・オルセン (Peder Olsen, +c. 1570) によって要約された。クリスチャン・ペザーセンは1514年にパリでサクソの『デーン人の歴史』の最初の出版に携わり、その続きである『サクソからクリスチャン1世までのデンマーク年代記』を執筆した。ポウル・ヘルゲセンは『略史 (Historia Compendiosa)』と題されたデンマーク王朝の簡便な年代記を執筆したが、歴史叙述に対する彼の最大の貢献は、1046年から1534年を扱った、いわゆる『スキッピー年年代記 (Skibby krønike)』である。ペザー・オルセンはさらに多くのデンマーク史の記述を残している。その1つである『デーン人の事績 (Danorum Gesta)』はサクソの継続として企画されたのであろうが、印刷されることはなかった³⁵。

中世においてナショナルな歴史記述に関心を抱いたのは、聖俗の権力者であった。たとえば『デーン人の事績』の前文は、サクソは大司教アブサロンに作品を執筆するよう命じられたとすることで始まっている³⁶。おなじく、その最初の印刷本は王や司教の同意を得て出版された。中世を通じて権力が次第に集権化され、それに引き続いて近

代国家が形成されたが、この国家はナショナルな歴史の創造にいつそう積極的な役割を果たした。国家は予備的な研究に直接関わり、作品の最終形式にお墨付きを与えた。かくして16世紀後半にデンマークの中央行政は、16世紀の国家の要請に見合うように、サクソの『デーン人の事績』を最新の形に改変したのである。

こうした作業に初めて貢献したのは、ハンス・スヴァニング (Hans Svaning) である。国王の援助を得た彼は史料を集め、1550年代以降ラテン語の手稿に着手した。1579年、尚書局長ニルス・コース (Niels Kaas) は、スヴァニングに作品を提出するように求め、その『デンマーク史 (Historia Danica)』をコペンハーゲン大学に評価するように命じた。1575年ごろ、アナス・セアンセン・ヴェデル (Anders Sørensen Vedel) は、尚書局長に対しデンマーク史の計画を提出したが、スヴァニングがそうであったように、王室付き歴史記述者としての公的地位を得ることは適わなかった。その地位についた最初の人物はニルス・クラールであったが、彼は義務付けられたものをいささかも完成させることはできなかった。それゆえ、国家によるナショナルな歴史プロジェクトの唯一の結果は、アイルズ・ヴィットフェルト (Arild Huitfeldt) の『デンマーク史』であった。第1巻は1595年に出版され、それから9年間の間に、伝説的なダン王に始まる通史をカバーする9巻が印刷に付された。ヴィットフェルトがデンマーク語で執筆したこの作品は、1世紀以上に渡り、デンマークの読者にとってデンマーク史の基本的な説明としての地位を保ち続けた。1652年には、『デンマーク王国年代記』という表題のもとに2巻本として第2版が出版された。ヴィットフェルトによるこの年代記の後継は、1732年から35年にかけて出版されたルドヴィ・ホルベアの『デンマーク王国の歴史』であった。この作品は1865年まで何度も再版され、ナショナル・ヒストリーを編纂するという昔ながらの王朝風手法という点で、当初より大変な人気を博した³⁷。

19世紀前半に湧き上がったロマン主義運動は、ナショナルな歴史記述に民族、ナショナルな特性、ネイションという観念を盛り込もうとする意識に拍車をかけた。この時代、歴史はナショナルな特

性を認識し、個性を理解する手段であると考えられた。ナショナル・デモクラシーを求める政治闘争のさなかにあつて、歴史は人々に広く訴えるナショナル・アイデンティティを創出する根本的な機能を獲得した。この新しい動きの担い手たちは、エリート貴族を対象とした中世のナショナル・ヒストリーとは対照的であつた。新たな平等主義が生み出した「デンマーク歴史協会 (Den danske historisk Forening)」とその機関誌である『歴史学雑誌 (Historisk Tidsskrift)』の主幹たる使命は、ナショナルなパースペクティブで歴史研究を推進し刊行することであつた。19 世紀のデンマークの歴史家の大部分はナショナル・リベラルの気風を持ち、程度の差はあれデンマーク史のみを研究した。19 世紀半ばのナショナル・リベラルの歴史家のなかで際立っているのは C・F・アレンであつた。彼の歴史理解のキー概念は自由なデンマーク民族、つまり特殊デンマーク的なネイション特性を体現した農民と都市民であつた。彼は 1840 年に初版の刊行された『民族と国家の内的発展から見た祖国史のハンドブック』において、中世末から現代に至るまで、本来人民のものであるとされる民主的諸権利の回復過程としてデンマーク史の筋道を推し進めた。本書は 8 版を数えるほどに人気を博した。アレンは序文で、ナショナルな感情と心性を奮い立たせるために祖国史はまことふさわしいと述べた³⁸。彼の理解は正しかったように見える。ナショナル・リベラルな視点からの歴史の受容は、19 世紀デンマーク社会において広範な理解を得られていたからである³⁹。

本書が後世に与えた影響は極めて大きい。たとえ 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての歴史家世代が、19 世紀初頭から半ばにかけての世代と対立していると自認していてもである。もちろん批判的歴史家が、多くの点でその前任者たちよりも科学的なアプローチを採用していることは否定できない。とはいえ、ナショナル・ヒストリーは歴史に対するアプローチとしてはなおも支配的であり、1900 年ごろになっても主要なナショナル・ヒストリーのプロジェクトが着手された。クリスチャン・エアスレウ (Christian Erslev) は、C・F・アレンの数多くのアイディアにかき立てられ、1241 年から 1340 年までの期間をカバーする最初

の巻を執筆した。この「デンマーク王国史 (Danmarks Riges Historie)」は、1896 年から 1907 年にかけて全 6 巻で刊行された⁴⁰。20 世紀には、この記念碑的作品に引き続いて、ナショナル・ヒストリーが次々に刊行された。1914 年から 1915 年にかけて、A・ファブリキウス (A. Fabricius) は一般向けの『民族のための図説デンマーク史』を刊行した。その 10 年後にはエリック・アロップ (Erik Arup) が個人による『デンマーク史』の第 1 巻を、1932 年には第 2 巻を、彼の死後の 1955 年には彼の後継者であるアクセル・E・クリステンセン (Aksel E. Christensen) の手で第 3 巻を刊行した。1962 年には 14 巻本の『デンマーク史』の刊行が始まり、その 10 年後には 10 巻本の新しい『デンマーク史』の第 1 巻が発刊された。大学の教科書として企画されたこの包括的なシリーズの刊行が終了しないうちに、より一般向けに図版がふんだんに用意された 16 巻本の『デンマーク史』の刊行が始まった。このシリーズの編者は序文において、「新しい世代はその世代に相応しいデンマーク通史をもたねばならない」と記した。この第 1 巻が執筆されたのは 1988 年であるが、20 世紀を振り返ってみるに、編者の言葉はまことに正しい⁴¹。

中世以来のデンマーク史の確固たる潮流は、この記念碑的作品をもって 20 世紀の頂点を迎えたが、その勢いは現在に至るまで退潮の兆しはない。1988 年から 91 年にかけて刊行された『デンマーク史』の新版が、2002 年から 2005 年にかけて刊行され、デンマーク史という分野への新規参入は 21 世紀の最初の 10 年においてすら現れている⁴²。しかしながらこの分野の将来は問題含みである。ヨーロッパにおける政治の展開と止まるところのないグローバリゼーションは、国民国家とナショナル・アイデンティティを緊張せしめている。このような同時代の展開により歴史家は、歴史研究の暗黙の枠組みとしてのナショナルな歴史記述とネイションの関係の再考をせまられている。

ナショナル・ヒストリーの妥当性

サクソと 18 世紀までのその後継者たちは、王国と民族を表裏一体と見なすことにより、ナショナルな結束に資するプロパガンダを喧伝し、貴族

エリートの中にナショナル・アイデンティティを醸成した。それとは対照的に、19世紀から20世紀にかけて刊行された驚くべき多数のデンマーク史は、より広範な公衆——民主的市民——に対し、国民観念を広めるよう企図された。いずれの場合もデンマーク王国、そしてその後のデンマーク国家の境界は、ナショナルな感情を掬いあげるのが著者の意図である限りにおいて、歴史研究にとっては自然でもありかつ十分な地理的枠組みであった。とはいえ、ナショナル・ヒストリーという観念がどこまでさかのぼるのか、そしてそれがどこまで分析的に意味を持ちうるのかは議論の余地がある。サクソは、国王の周囲にエリートが集まるというナショナルな結束という観念を唱導しようとした。当然の事ながらこれは、ネイションの歴史を霞がかった伝説的な歴史へと投げ返して、王朝の栄えあるドラマチックな過去を創造し、歴史ある王家を寿ごうとしたからである。しかしながら驚くべきは、19世紀における「科学的躍進」を経た後ですら、歴史家たちがデンマーク・ネイションの説明を、それが創出されるはるか以前の時代にまでさかのぼらせたことである。たとえば、エリック・アロップの『デンマーク史』の境界は、彼が生きた時代のデンマーク国家のそれであり、その境界の中で生きる人間の最初の痕跡をもって叙述は始まっている。論理的にそのような分析は意味を持たない。デンマークの歴史の出発点となるのは、デンマーク・ネイションが創出された時代であることは言を俟たない⁴³。

デンマークで歴史記述が始まって以来、ナショナルな歴史記述の支配は、近年にいたるまで歴史研究を拘束してきた。歴史上のいかなる主題であれ、デンマークというナショナルなコンテキストから研究されてきた。このような歴史に対するナショナルなアプローチは、ある歴史現象がたとえばトランス・ユーロピアンあるいはグローバルなコンテキストで観察される場合であっても、それを特殊デンマーク的な性質を持つものとして、いささかバイアスのかかった概念を生み出した。それに加えて、近代の国民国家は、幾重にも層となる前近代の歴史研究にアナクロニスティックな枠組みを与えてきた。いずれの場合においても、ナショナルな枠組みは、分析的な目的を満足させると

いうよりもイデオロギー的な目的に資するものであった。

とはいえ、中世王国や近代国家といったナショナルな中央権力によって支配される領域は、ある種の歴史研究にとっては十分な分析的境界となりうる。たとえば一般経済史の場合、ある中央権力は、それは他の中央権力の領域の内部に広がる法的・行政的状況とはまったく異なる自身の境界内において、経済生活のための一般的背景をつくりあげる。この中央権力の領域とは、格差なき生活条件を期待する、言ってみればそれに慣れ親しみ追い求める人々の生活空間 (habitat) である。しかしながらこのような条件は、中央権力が生み出す法的制度的枠組み、言い換えれば政治や伝統によってのみ準備されるわけではない。生活の基礎的条件は自然が用意するし、中央権力の領域分割は、多少なりとも自然境界の枠内で自然環境が提供する地理的単位と一致する。最後に付け加えておこう。中央権力は王国にあるかなりの程度のリソースを自由に用い、したがって意図のあるなしにかかわらず、そのリソースの利用と配分に影響を与えることになる。それゆえ、一般経済の研究にとりかかる前に、その分析に相応しい時間枠と地理的枠組みを設定するために答えておかねばならない問題が3つある。問題となる中央権力はいつ生まれたのか。それは問題となる期間においてどのような形をとったのか。我々はそれを地理的にどのように区切ることができるのか。

すでに触れ、そして以下で議論するように、デンマークという中央権力が生まれたのはそれほど古いわけではない。それは中世王国から絶対主義国家へと変貌し、その後近代民主国家へと変容した。デンマークの統治形態もそれを定義する地理も、デンマーク中央権力の800年にわたる歴史のなかで一定であったことはない。このような絶え間ない変化はデンマーク社会の物質生活と精神生活に多大な影響を与え、それゆえデンマークの一般経済史分析を適切な分析的時代枠と地理空間に分割する自然な手法を与えることになった。

デンマークのリソースを巡るビョーン・プルセンと私の共同研究は、1000年から1550年にわたる期間をカバーする⁴⁴。中央権力が中世王国から国家への変容を完成させるのが16世紀であると

論じているので、1550 年という年代は我々の研究にとって言わずもがなの終点となる。更に言えば、1536 年の宗教改革は、かなりの土地の再分配と行政における深甚な変化をもたらした。王国の 3 分の 1 にものぼる教会の所有地は王権によって没収され、司教は政治体制から追放された。それでは中世デンマーク王国はいつ成立したのか。そしてこの王国の領土は、その最初期から 16 世紀にいたるまでどのように展開したのか。こうした問題が我々の研究の地理的かつ時間的枠組みを決定することになる。

すでに述べたように、現在に伝わる最古のデンマークの記述は、『古英語版オロシウス』に見える、ノルウェー人オウツタルがノルウェーからスレスヴィにあるヘゼビューへ移動した旅行記録である。『古英語版オロシウス』中にはまた、ウルフスタンのヘゼビューからバルト海に至る旅路も記されている。これらの記述は確かにデンマーク王国の存在を示唆しているだろうが、この時点でデンマーク王国は統一されていない⁴⁵。9 世紀の『フランク王国編年誌』や 10 世紀から 11 世紀のドイツやイギリスの歴史記述は、考古学的証拠とともに、デーン人の政治的アイデンティティに触れる最古の言及である。これらの史料からは、当時の政治構造は貴族クランや利害グループを率いる好戦的な首領を基盤としていたという印象を受ける⁴⁶。スカンディナヴィア人が西ヨーロッパの沿岸部にとって深刻な脅威となる数世紀前には、すでに帆走が原動力となっていたので、国内で成功しなかった首領は海外への遠征に慰めを求めることも可能であった⁴⁷。彼らが遠征の途についた主たる動機は、何事をも我が物とできるからであった。奴隷の捕獲に加えて、労働や財産を獲得する最もありふれた手段は、商業、略奪、そして貢納であった。ヴァイキングの略奪を記述する海外の史料や、スカンディナヴィア人が——時として立ち去ることと引き換えに——貢納や“贈与物”を集めたそのやり方の証言から、我々は実態を知ることができる⁴⁸。この手の領有の可能性は、デンマークの中では限られていた。考古学的な発掘により、鉄器時代からヴァイキング時代にかけて豊かな商業的中心地がデンマークにあったことは確かであるが、12 世紀以前には大規模な農業生

産の証拠はなく、略奪にたる宗教施設も存在していなかった。

イングランドや大陸における中央権力の強化したこともあって、豊かな西ヨーロッパはしだいにヴァイキングの略奪や植民活動に対して扉を閉じるようになった。それこそが中世デンマーク王国の統一にとって必要な第 1 の外的前提条件であった。彼らの活動舞台が縮小するや、首領たちは彼らの生活する地域をより効果的に開発する方向に舵を取らざるを得なくなった。デンマーク内のリソースに対する支配こそが、次第に富と権力への道を開くことになった。この支配は領域支配によってのみ達成されたわけではない。専門知もまた不可欠であった。そのノウハウはかなりの程度外国の教会人がもたらし——デンマーク人自身もヨーロッパへの旅行を通じて専門知を獲得したが——、彼らの組織つまり大聖堂と修道院を通じてデンマークの大地に移植された。このような理由により、デンマーク王国確立のための第 2 の外的前提条件は、11 世紀後半以降の北方世界への教会の浸透にあると言える。この時点からしかデンマークにおける土地所有の歴史をたどることができないのは、決して偶然ではない⁴⁹。

11 世紀におけるデンマークの地政学的状況を明確に描き出すことは容易ではない。ただ、プレーメンのアダムによるデーン人の土地に関する地理的説明は、かなり正確に現状を反映したものであろう。アダムはデーン人がいくつかの民族に分割されうろと思いついでいたが、彼の記述は、11 世紀末に彼が『ハンブルク大司教事績録』を書いたときにデンマーク王国の統一は既に始まっていたことを示唆している⁵⁰。また古銭の証拠によれば、この点においてクヌート大王がデンマークの最も重要な諸都市をすでに支配していたことが示唆されている⁵¹。11 世紀における王権の強化は、スヴェン・エストリズセン治下の貨幣改革に見出される⁵²。さらに王権は、クヌーズ聖王の課税の試み、いわゆる「ネフギャルズ」で力を得⁵³、教権と王権の間の繋がりを強めた。スヴェン・エストリズセンは教会とよい関係を保ったため、プレーメンのアダムはスヴェンがハンブルク＝プレーメン大司教アダルベルトに従順であり、寛大ですらあったと判断し、彼をこの大司教座の歴史記述

にとって信頼すべきソースと見なした⁵⁴。それに従えば、1060 年ごろデンマークでは教会の再編が行われた⁵⁵。スヴェン・エストリズセンはデンマークに大司教座を創設しようとの画策すら試みていたようであり、彼の息子のスヴェンは第1回十字軍（1096-1102）に参加した⁵⁶。しかしながらスヴェン・エストリズセンのデンマーク支配の試みは必ずしも成功しなかったし、それは彼の後継者たちにしても同様であった。1086 年におけるクヌーズ聖王の暗殺は、この時点においてデンマーク王はかならずしもデンマーク全土に支配圏を行使していないという事実を図らずも露呈した。デンマークをコントロールしていたのは、絶えず互いにいがみ合っている在地有力者による複雑な連合関係のネットワークであった。このゲームで力あるプレーヤーは、多少なりとも王権もしくは教権の行使にかかわっていた。こうしたプロセスにおいて王権と教権は不可欠のツールであり、それらは有力者によって徹底的に利用された。しかしながら権力は別のやり方でも行使された⁵⁷。

デンマーク王国の統一は必ずしも単線的なプロセスではなかった。ヴァルデマー1世による統一以前の1世紀半の間、諸地方は1人の王によって支配されることもあったようだが、大抵は複数の王が並立していた。しかしながらヴァルデマーの治世以来、デンマーク王国は常に統一されていたと論じてよい。例外はスコーネがスウェーデン王マグヌスに従属し、残りがホルシュタイン伯の抵当となっていた1330年代だけであった。にもかかわらず、中世のデンマーク王はしばしば激しい抵抗や反抗的な臣民に直面し、王国の統一は危機に陥った⁵⁸。クヌーズ6世とヴァルデマー2世の治世（1182-1241）は一時的な頂点であり、その間に権力は支配者の手に集中した⁵⁹。

デンマーク王国にかんする最初期の地政学的説明は、「王国建設の偉大なる時期」の最後にまでさかのぼる。1230年ごろの多様な手稿の集成であり、一まとめに『ヴァルデマー王の所領調査』として知られる15の目録で確認される⁶⁰。これは13世紀における中世デンマーク王国を構成する地理空間に対する概観を提供する。そこで得られる王国のイメージは、11世紀末のブレーメンのアダムによるデンマークの記述とおおよそ一致

する。目録がカバーするのは、ユラン半島、フュン島、シェラン島、スコーネ、ハッランドの主要な行政区であった。ロラン島、ファルスター島、ランゲラン島、さらに小さな島々、そしてエストニアとフェマーンという海外所領の記録もある⁶¹。エストニアとフェマーンは、1169年から1219年の間に確立された、デンマークによるバルト海支配領域の残滓であった。そのなかでエストニアが最も長期にわたってデンマーク領であり続けたのだが、そこですらデンマークによる支配の程度は議論の余地がある。エストニアの封臣は主としてドイツ系であり、デンマークの侵略者は現地民の大規模な抵抗にあい、ヘゲモニーを握るために長期にわたる努力を要した。最も重要であったのはレーヴァルの支配であった⁶²。1346年にヴァルデマー4世は、エストニアをドイツ騎士修道会にゆだねたとき、ノヴゴロドへの海路に位置するこの重要な港を売却した⁶³。

ブレキング侯領は『ヴァルデマー王の所領調査』にも現れないし、スレスヴィは、それがたとえ念入りに扱われていたとしても侯領として記録されているわけではない。12世紀半ばから少なくとも1280年代にかけての期間、スレスヴィ侯領は疑う余地なく王国の一部と見なされていた。この行政区の歴史において転換点となったのは1326年であった。というのも、スレスヴィ公ヴァルデマー・エーリクソンがホルシュタイン伯ゲアハルトによってデンマーク王に据えられたのが、まさにこの年だったからである。その直後ゲアハルトはスレスヴィを受封された。ヴァルデマー・エーリクソンの戴冠文書への補遺、いわゆる「ヴァルデマーの定め *Constitutio Valdemariana*」は、スレスヴィ侯領は同一君主のもと決してデンマーク王国と結び付けてはならないと定めている⁶⁴。中世末期、ホルシュタインとの密接なつながりに影響されたスレスヴィは自立的な地位を獲得した。スレスヴィはデンマークの他の封土よりもはるかに独立した領土となったが、ヨーロッパ的なパースペクティブにたてば、その地位はなにも特別なものではない。ポーランド、ハンガリー、ドイツ、フランス、イングランドといった他の王国において、特別かつ広範囲な特権の与えられた封土は珍しくなかった。たとえば、チェスタ、ランカスタ、

ダラムといったイングランドのパラティン伯領は——スレスヴィと同様に——通常の王国行政からは除外されていた⁶⁵。このような理由から、中世におけるデンマークのリソースの研究からスレスヴィを除外することは正しくない。他方でスウェーデンとノルウェーが除外されねばならないのは、それらがたとえ14世紀末以来、デンマークとのスカンディナヴィア連合王国（いわゆるカルマル連合）を形作っていたとしても、別々のアイデンティティと政治構造を保持していたからである。

現実政治という観点に立てば、かくのごとく曖昧に構成された北欧連合とは、メクレンブルク家、ハンザ諸都市、ドイツ騎士修道会がスカンディナヴィア諸国に与えるプレッシャーへの緩衝材として、王妃マルグレーテ1世を中心にうちたてられた実利的組織であった。実際にカルマル連合はほどなく解体した⁶⁶。1434年のスウェーデンでの反乱の後に条約の再交渉がなされたとき、3王国の連合に不可欠の要素である国王共有政体という概念は打ち棄てられ、1448年にはカール・クヌートソンがスウェーデン王として選出された⁶⁷。1457年にはスウェーデン議会がカール・クヌートソンと決裂し、再度3王国がクリスチャン1世という1人の王によって支配された。しかしスウェーデンにおける彼の権力は1464年に終了していたというのが現実であった。彼の後継者であるハンス、クリスチャン2世、フレゼリク1世はノルウェーとデンマークの支配者ではあったが、スウェーデンのそれではなかった。1448年にクリスチャン1世がデンマーク王に登位してからフレゼリク1世がスウェーデンへの王位請求権を諦めるまでの76年間、スカンディナヴィア3王国が政体を共有したのはわずか10年だけであった。

それゆえ、社会経済的研究に中世デンマーク王国——中世後半はスレスヴィ公領もふくめて——の地理的境界を反映させることは妥当である。その空間は、アイダー川までのユラン半島、スコー

ネ、ハッランド、ブレキング、シェラン島、フエン島、ロラン島、ファルスター島、そしてそれらに隣接する島嶼とボーンホルム島を含む。対象とされる時代は、デンマーク王国の萌芽が確認される11世紀から、中世王国が近代国家への変容を完了する16世紀半ばまでである。

私とビョーン・プルセンの手になる『デンマークのリソース、1100年から1550年：成長と退潮』は、このような性質をもつ最初の包括的研究である。12世紀から16世紀半ばまでの期間を扱うきわめて短い説明は1933年に刊行された。その時代にあつては大変卓抜した成果であったが、今や時代遅れである。最新のデンマーク経済史は1500年を起点にしているというのが現実である⁶⁸。それにもかかわらず、中世の社会経済的側面に対して行われた調査研究の量は膨大である。ほとんどのヨーロッパ諸国がそうであるように、社会経済史は20世紀デンマーク中世研究の転換点を示している。2人の著者は、1世紀に渡る歴史研究が生み出したデータを新しいコンテキストにおきなおし、入手しうる中世の史料に基づいて幾重にもわたる情報を組み込んだ。長きにわたる歴史叙述の伝統と歩を合わせるように、この研究の焦点は、人間社会が自然環境に——そしてその逆も——与えるインパクトを含む人間と自然の相互作用にある。

11世紀から16世紀半ばにいたるまでのリソースの変動の説明を提示するために、本書はかつて私が試みたある種の歴史叙述の伝統にのっとっている⁶⁹。まずは、デンマーク社会を例とした場合、中世のリソースの展開は、11世紀から14世紀まで一貫して増加し、その後の期間は全般的に退潮するという観点から記述することはできないとを提示するからである。もう1つは、単一原因論がリソースの変化に十分な説明を与えようという見方を退けるからである。

¹ Patrick J. Geary, *The Myth of Nations. The Medieval Origins of Europe*. New Jersey: Princeton UP 2002, pp. 43, 73-74, 81 & 141-142 (鈴木道也他訳『ネイションという神話 ヨーロッパ諸国家の中世的起源』白水社 2008年)。

- ² Walther Pohl, "Introduction: Strategies of distinction." in: Walter Pohl & Helmut Reimitz eds. *Strategies of Distinction. The Construction of Ethnic Communities 300-800*. Leiden: Brill 1998, pp. 2-9.
- ³ Anre Soby Christensen, *Cassiodorus, Jordanes and the History of the Goths*. København 2002, pp. 268-269 & 299-300.
- ⁴ "Procipii De Bello Gothico." in: Gerhard Wirth ed. *Procopii Caesariensis Opera Omnia*, vol. II. Leipzig 1963, II-15, pp. 215-217; D. Coste trans., *Prokop, Gothenkrieg*. Leipzig 1885, pp. 123-125.
- ⁵ "Gregorii Episcopi Turonensis Historia Francorum." W. Arndt & Br. Krusch eds. *Monumenta Germaniae Historica. Scriptorum Rerum Merovingicarum*, vol. 1, Hannover 1884, p. 110.
- ⁶ Kristian Hald, "Daner." *Kulturhistorisk Leksikon for Nordisk Middelalder*, vol.2, København 1957, column 643-646.
- ⁷ *Diplomatarium Danicum*, vol 1-1. København 1975, nos. 1, 25, 27, 32, 39, passim.
- ⁸ G. H. Pertz ed. *Annales Regni Francorum*. Hannover 1895, pp. 49, 60 & 103.
- ⁹ *Ibid*, pp. 126, 163 & 175.
- ¹⁰ G. H. Pertz & G. Waitz eds. *Einhardi Vita Karoli Magni, Scriptores Rerum Germanicarum ex Monumentis Germaniae Historica*. Hannover 1965 (1911), pp. 15 & 17.
- ¹¹ "Annales Fuldenses." in: Reinhold Rau ed. *Quellen zur Karolingischen Reichsgeschichte 3* (Ausgewählte Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters, vol. VII.) . Berlin 1960, p. 152: *Erat autem ibi gens fortissima in Nordmannos Danorum, quae numquam antea in aliqua munitione vel capta vel superata auditur.*
- ¹² "Rimbert, Vita Anskarii." in: W. Trillmich and R. Buchner ed. *Quellen des 9. und 11. Jahrhunderts zur Geschichte der hamburgischen Kirche und des Reiches* (Ausgewählte Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters 9) . Darmstadt 2000, p. 16: *Incipit Libellus continens vitam vel gesta seu obitum Domni Anskarii primi Nordalbingorum Archiepiscopi et legati sanctae sedis apostolicae ad Suenos seu Danos necnon etiam Slavos et reliquas gentes in aquilonos sub pagano adhuc ritu constitutas.*
- ¹³ *Ibid*, pp. 30, 44, 36, 32, 46, 50, 78, 94, 102.
- ¹⁴ "Regino von Prüm." in: Reinhold Rau ed. *Quellen zur Karolingischen Reichsgeschichte* (Ausgewählte Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters, vol. VII.) . Berlin 1960, p. 266: *Eodem anno Nortmanni, qui in Chineim ex Denimarca venerant, adsentiente Godefrido Rhenum ascendant et Duisburh oppido occupato, munitionem en eodem loco solito construunt et in eo tota heime resident.*
- ¹⁵ Janet Batley ed. *The Old English Orosius*. London 1980, p. 16: *Ða he piderweard seglode fram Sciringesheale, þa wæs hi mon þæt bæcbord Denamaerc, on þæt steorbord widsæ þry dagas.*
- ¹⁶ *Ibid*, pp. lxxxiii & lxxxviii-lxxxix.
- ¹⁷ *Ibid*, pp. xxiii; Dorothy Whitelock ed. *The Anglo-Saxon Chronicle*. New Brunswick 1961, p. xi note 3.
- ¹⁸ A. Campbell ed. *Chronicon Æthelweard. The Chronicle of Æthelweard*. London 1962, pp. 6-7: *Impletusque est numerus annorum ab incarnatione dominica quadringenti et quadraginta nouem. ... nam illis diebus agilem audierunt esse piratico in opera gentem Saxonum in tota maritime a Rheno fluuio usque Doniam urbem, quae nunc uulgo Danmarc nuncupatur, ac in omni armature robustam.*
- ¹⁹ Erik Kroman ed. *Danmarks Middelalderlige Annaler*. København 1980, passim; *Annales Regni Francorum*, p. 166.
- ²⁰ Lis Jacobsen & Erik Moltke ed. *Danmarks Runeindskrifter*. København 1942, column 65-78.
- ²¹ Nils Hybel, *Danmark i Europa 750-1300*. København 2003, pp. 79-80.
- ²² *lant mana* の意味は確定していない。「土地所有者」、「住人」、「ユラン半島北部における第一の人物」などが提起されている。 *Danmarks Runeindskrifter*, column 170-171.
- ²³ <http://www.sitecenter.dc/schleu.dk/karlevi/>
- ²⁴ *DD*, vol. 1.1, no. 330.
- ²⁵ *marca* とは境界を意味するフランク時代の用語。カロリング家のもとでこの用語はヨーロッパ中に広まった。伯によって支配される中世王国の中核に対して、中世において *marca* は辺境伯 (英 Marguess、仏蘇 Marquis、独 Markgraf) によって支配された。
- ²⁶ *DD*, 1.1, no. 343.
- ²⁷ Hybel 2003, pp. 73-84.
- ²⁸ *DD*, 1.1, no. 397-398.
- ²⁹ *DD*, 1.2, nos. 23, 32.
- ³⁰ "Chronicon Roskildense." in: M. Cl. Gertz ed. *Scriptores Minores Historiae Danicae Medii Aevi*, vol. I. København 1970, p. 15;

³⁰ "Magistri Adam Bremensis. Gesta Hammaburgensis ecclesiae Pontificum." in: W. Trillmich and R. Buchner ed. *Quellen des 9. und 11. Jahrhunderts zur Geschichte der hamburgischen Kirche und des Reiches* (Ausgewählte Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters, vol. XI). Darmstadt 2000, pp. passim; Karsten Friis-Jensen ed. *Saxo Grammaticus. Gesta Danorum*. København 2005, pp. passim.

³¹ "Ælnothi Monachi Historia ortus, vitæ, & passionis S. Canuti Regis Daniae." in: Jacobus Langebek ed. *Scriptores Rerum Danicarum Medii Ævi*. Hauniae 1774 (1969), pp. 327 & 389: Principum Duci præcipuo nobilium Primicerio, pio invicto, magnifico, Daciae Provifori ferenissimo, tam specie, quam & nominis dignitate, illustrissimo Regi, Nicholao, divini officii ministrorum infinus, Ailnotbus, Cantii Anglorum Metropolitana urbe editus, jam vero Daciae qvotuor qvingveniis bis fere vinis annis demoratus, hostium vires virtute divina subvertere contumacium colla potential pede proterere, regni jura decenter felicitates beatitudinne ditari ... Hæc ego Ailnothus, Sacerdotum infimus, Anglorum orbe editus, & Daciae partibus annis numerosis oeregrinatus, tibi, Rex præclare & Martyr pretiose, tua exarando gesta, dictavi.

³² Hybel 2003, pp. 195-208.

³³ Saxo, 14.28, 16: Filio uero post eum proxime regnatura liberum fore paternas conditiones abdicere, ne ad omnem Danorum gentem hereditarium minaret obsequium.

³⁴ Saxo, 1.1, 3: Uerum a Dan, ut fert antiquitas, regum nostrorum stemmata, seu quodam deriuata principio, splendido successionis ordine profluxerunt.

³⁵ Nanna Damsholt, "Tiden indtil 1560." in: Søren Mørch ed. *Danmarks historie*, vol. 10. København 1992, pp. 11-51.

³⁶ Saxo, Praefatio.

³⁷ Torben Damsholt, "Den national magtstat 1560-1760." in: Søren Mørch ed. *Danmarks historie*, vol. 10. København 1992, pp. 53-1, 88.

³⁸ C. F. Allen, *Haandbog i Fædrelandets Historie med stadigt Henblik paa Folkets og Statens indre udvikling*. København 1840.

³⁹ Jens Chr. Manniche, "Historieskrivningen 1830-1880." in: Søren Mørch ed. *Danmarks historie*, vol. 10. København 1992, pp. 237-240 & 242-252.

⁴⁰ Johannes Steenstrup et al. *Danmarks Riges Historie*, 6 vols. København 1896-1907.

⁴¹ A. Fabricius, *Illustreret Danmarks Historie for Folket*. København 1914-15; Erik Arup, *Danmarks Historie*, 3 vols. København 1925-55; John Danstrup & Hal Koch eds. *Danmarks Historie*, 14 vols. København 1962-66; *Danmarks Historie*, 10 vols. København 1977-92; Olaf Olsen ed. *Danmarkshistorie*, 16 vols. København 1988-91.

⁴² たとえば, Sten Busck, *Danmarks historie – i grundtræk*. Aarhus 2000; Ole Feldbæk, *Gyldendals Bog om Danmarks Historie*. København 2007.

⁴³ Hybel 2003, pp. 14-15.

⁴⁴ Nils Hybel and Bjørn Poulsen, *The Danish Resources c. 1000-1550. Growth and Recession*. Leiden and Boston 2007.

⁴⁵ *The Old English Orosius*, p. 16. ノルウェーにおけるスキリングサルの位置、そしてそこからヘゼビューへのオウツタルのルートは議論の余地がある。このような不確かな背景のために、オウツタルが言及するデーン人の領域は様々に解釈されうる。Kjell-Olav Masdalen, "Skipsfarten langs Agderkysten i vikingetid og middelalder." in: *Aust – Agder – Arv*. Arendal 2007, pp. 31-65.

⁴⁶ "Annales Regni Francorum. Die Reichsannalen." Reinhold Rau ed. *Quellen zur Karolingischen Reichsgeschichte* (Ausgewählte Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters, vol. V.). Darmstadt 1968.

⁴⁷ デーン人の帆船利用に関する最古の(しかし不確かな)示唆は、シドニウス・アポリナリスがサクソン人の帆走を記録した 473 年にさかのぼる。その次のより説得的な証拠は、7 世紀から 8 世紀にかけてのゴットランドの美術で確認される。帆の利用は、フリースラントを基点に東と北へ広がったと考えられる。Jan Bill et al. *Dansk søfarts historie*, vol 1. København 1997, pp. 49-52.

⁴⁸ たとえばスカンディナヴィア人は、889 年にパリを立ち去るよう支払われた。"Annales Vedastini, Jahrbücher von St. Vaast." in: Reinhold Rau ed. *Quellen zur Karolingischen Reichsgeschichte* (Ausgewählte Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters, vol. VI.). Darmstadt 1966.

⁴⁹ Ibid.

⁵⁰ たとえば彼は、「ユラン人が呼ぶところのデーン人 Dani, quos Iuddas appellant」と述べる。AB, *Descriptio Insularum Aquilonis*, p. 13.

⁵¹ Jørgen Steen Jensen ed. *Tusindtallets Danske Mønter*. København 1995, pp. 28-31, 34-37 & 46-50.

⁵² Ibid. pp. 19-20, 112.

⁵³ 言葉の意味は「鼻の税」つまり人頭税である。SM, 1, p. 24.

⁵⁴ AB, 1:48, 2:38 & 3:23 & 54.

⁵⁵ ユラン半島には、スレスヴィ、リーベ、オーフス、ヴィボー、ヴェンドシュッセルの5つの司教座があった。スコーネとロスキレはそれぞれに司教を持ち、フエンにはオーデンセがあった。Ibid, 3:77.

⁵⁶ 教皇グレゴリウス7世からの2通の書簡では、その直接の前任者の時代に、スヴェン・エストリズセンがデンマークをハンプルク＝プレーメンの教会管区から開放しようと試みたことが示唆されている。それとは逆に書簡は、スヴェンがその計画への関心を失った時点で、グレゴリウスがデンマークの大司教座を創設を試みたというようにも読める。DD, 1.2, nos. 11 & 13.

⁵⁷ Lars Hermansson, *Släkt, vänner och makt: en studie av elitens politiska kultur i 1100-talets Danmark*. Göteborg 2000.

⁵⁸ たとえば、ヴァルデマー1世が共同統治者として息子クヌーズ6世を戴冠した1170年、前王エーリク・ラムの息子マグヌスは、ユラン半島に地盤を持つトゥルゴット家門のメンバーをも含む反乱を引き起こした。1182年にクヌーズが即位した後、スコーネでは深刻な反乱が起こった。1240年から1330年までは、ヴァルデマー2世の2人の息子アーベルとクリストファの子孫間でいさかいに端を発する王朝間闘争に特徴づけられる。1313年には国王エーリク・メンヴェズに対してユラン半島で反乱が起こった。1360年代はユラン出身の貴族たちがヴァルデマー常日王に抵抗し、1348年から1441年まではデンマーク全土で農民反乱が起こった。

⁵⁹ Hybel 2003, pp. 195-208 & 223-241.

⁶⁰ 目録の総体が単一的でないという特徴の理由として、国王役人がばらばらの時日に保持していたものを編纂した、そして(もしくは)そのことが王国文書局と何らかの関係があるということを挙げてもよい。Mikael Venge, "Valdemar Sejrs fogeder." *Zise* 3 (1995), pp. 100-110.

⁶¹ Svend Aakjær ed. *Kong Valdemars Jordebog*. København 1927, 1.2.

⁶² 何にもまして穀物はレーヴァルから輸出された。DD, 2.4, no. 260.

⁶³ DD, 3.2, no. 273.

⁶⁴ 「ヴァルデマーの定め」が戴冠文書に対する本当の補遺であるのか、それとも偽文書であるのかははっきりとしない。というのも、この規定は1448年にクリスチャン1世が発した書簡の中に収められているからである。DD, 2.9, no. 273.

⁶⁵ William Christensen, *Dansk Statsforvaltning i det 15. århundrede*. København 1903; Horst Windmann, *Schleswig als Territorium. Grundzüge der Verfassungsentwicklung im Herzogtum Schleswig von den Anfängen bis zum Austerben des Abelschen Hauses in 1375*. Neumünster 1954; Nils Hybel, "Palatine." in: *Den Store Danske Encyklopædi*, vol. 14. København 1999, p. 625.

⁶⁶ Aksel E. Christensen, *Kalmarunionen og nordisk politik 1319-1439*. København 1980.

⁶⁷ Aage Andersen ed. *Den danske rigsgivning 1397-1513*. København 1989, nos. 7 & 8.

⁶⁸ Erik Arup, "Die Wirtschaft des Mittelalters." in: Axel Nielsen, *Dänische Wirtschaftsgeschichte*. Jena 1933, pp. 1-79; Ole Feldbæk, *Danmarks økonomiske historie, 1500-1840*. Herning 1993; Ole Hyldtoft, *Danmarks økonomiske historie, 1840-1910*. Herning 1999; Jan Petersen, *Danmarks økonomiske historie, 1910-1950*, forthcoming; Henrik Christoffersen, *Danmarks økonomiske historie, 1959-*. Herning 1999.

⁶⁹ Nils Hybel, *Crisis or Change. The Concept of Crisis in the Light of Agrarian Structural Reorganization in Late Medieval England*. Aarhus 1989.